



只見町ブナセンターだより

<季節のごあいさつ>

今年は残暑が続いた影響で、例年より少し遅めだった紅葉も終わりを迎え、冬が近づいてきました。浅草岳の山頂付近はすでに雪に覆われています。

===== 開 催 中 =====

【企画展】

企画展「只見の外来生物—その生態と影響」

■会 期：2018年11月23日(金)～2019年3月18日(月)

■場 所：ただみ・ブナと川のミュージアム 2階ギャラリー

只見町は奥山に位置し、外来生物が侵入するような人間活動がほとんどなかったことから、現在の所、定着している外来生物も少なくその影響も大きくありません。そのため、地域固有の生物相が保存されています。しかし、近年、道路状況の改善などにより、只見町にも少しずつ外来生物が侵入、拡大し、その影響が増しつつあり、固有の生物相を守るための行動が求められています。この企画展では、外来生物を理解するために必要な生態と只見町の外来生物の現状および影響を紹介し、それらへの対策を提案します。



===== 活 動 報 告 =====

【自然観察会】 8月5日(日)

浅草岳山麓 大久保沢のブナ林を観察

浅草岳の只見沢登山道入り口から田子倉眺めまでのルートで登山道沿いに成立するブナ天然林やトチノキ・サワグルミを主とする山地溪畔林、斜面の低木林など様々な植生を観察し、只見町の特徴的な自然環境について学ぶための観察会を開催しました。

只見沢沿いでは、斜面崩壊や沢の氾濫などの攪乱の頻度が高く、比較的新しい攪乱が起こった場所にはサワグルミ林が成立しています。そして、環境が安定してくるとトチノキやブナ等を主要樹種とする森林に遷移していく様子を見ることができます。豪雪地帯でブナは、高木層のほとんどを占める純林を形成します。また、一般的にブナ林は下層植生にササを伴いますが、只見町では只見川以西を中心に林床にユキツバキを伴うブナ-ユキツバキ群落が見られます。実際のブナ林を前に、その特徴や自然環境について観察しました。大久保沢の水場にあるブナの巨木の下には、今年つけたブナの雄花がたくさん落ちていました。雄花や殻斗を手に取り、ブナの繁殖について説明しました。大久保沢の水場から標高を上げていくとブナ林からミヤマナラ、マルバマンサクなどの低木林になります。山の急な斜面では、雪崩に耐えることのできる低木、尾根には貧栄養でも生育できるツツジなどの仲間が見られます。周辺の植生の変化を感じながら、ガレ場を抜けるとようやく田子倉眺めにたどり着きました。



▲田子倉眺めからの景色を楽しむ参加者



▲大久保沢の水場での集合写真

そこからは、田子倉ダムだけでは無く、鬼力面山の万年雪や浅草岳頂上部などが一望できます。つらかった登りを抜けて見られる展望に参加者の方も驚嘆していました。

当日は 20 名の方にご参加いただき、登山道沿いに、生育環境の違いによるそれぞれの植生や雪食地形など町の特徴的な自然景観等を総合的に知っていただく良い機会となりました。



【『ただみ観察の森』観察会】 9月1日(土)

下福井のブナ水源林を歩く

『ただみ観察の森』は、只見ユネスコエコパーク地域内の自然環境や野生動植物の現状を理解し、身近に触れてもらうことを目的として町が指定した場所です。今年度は、この『ただみ観察の森』を活用した観察会をブナセンター主催で開催しています。第2弾は、下福井集落の共有林である「下福井のブナ水源林」を観察地としました。

この日はあいにくの雨で、傘をさしながらの観察会となりました。東側の入口から入るとスギやコナラに巻き付いて上へ上へと上るフジのツルが目に入ってきます。ツル植物は、支持体への取り付け方で「巻き付き型」「巻き髭型」「吸着根型」「寄り掛かり型」に分けることができます。フジは「巻き付き型」で、巻き付いた樹木に幹が食い込むほど成長し、それを枯らしてしまうこともあり、最後は共倒れになります。さらに、林床には巻き付く相手を探すフジの走出枝が縦横に這っており、その強かな姿を観察しました。林床の湿った場所に生えるミヤマカンスゲ（ヒロロ）は、只見町ではミノやショイカゴの材料として利用します。ちょうど採取時期を迎えたヒロロは、真中の葉をつかんで引っ張ると根本からスポッと抜け、採取したものを実際に手で縊ってみました。

折り返し地点には、見上げる斜面に胸高直径 60～100 cmのブナの大木が並んでいます。ここは、地域住民により、水林（みずばやし）として 100 年以上にわたり伐採されることなく、大切にまもられてきたブナ林です。大木が多い代わりに幼樹が少なく、またブナ以外の樹種が少ないのが特徴です。参加者には、実際に巻尺で胸高直径を測定してその太さを実感していただきました。また、今年はブナ堅果の成り年にあたり、双眼鏡を使ってブナの枝先の殻斗を探し、地面に落ちた堅果も拾って観察しました。

観察会が終わるころには雨があがっていました。観察会の参加者は 9 名で、只見ユネスコエコパークの自然環境について理解し、地域住民と森林との関わり、自然利用の歴史を理解していただくよい機会となりました。



▲傘を差しての観察会となりました



平成 30 年度只見ユネスコエコパーク関連事業

【自然環境・社会文化基礎調査（古民家実態調査）成果報告講演会】 9月24日（月・祝）

只見の古民家は何の木でつくられているのか？

只見町には古民家（厩中門造りの伝統的家屋、いわゆる曲がり屋）が多数存在しています。これらの古民家は、只見地域の特有の景観要素であるとともに、文化財でもあり、かつての住民と自然環境との関わりを知る上での貴重な資料です。しかし、過疎高齢化やライフスタイルの変化によって空き家になり、老朽化や管理の難しさから解体され、急速に失われつつあります。そこで、これら古民家の保全のための基礎資料として、その実態調査が求められていました。2015 年度の『自然首都・只見』学術調査研究助成事業の中で信州大学教育学

部の井田秀行准教授を中心とした研究グループが只見の古民家の調査を行い、その後、2016年度からは、町の委託事業（自然環境・社会文化基礎調査）として継続調査が行われてきました。今回は、ここまでの調査研究の成果について報告会として開催されました。

報告者は、この古民家実態調査の委託先である信州大学教育学部の井田秀行准教授でした。井田氏は、森林生態学を専門とさ

れていますが、古民家が好きで自身も古民家に暮らし、その延長で古民家の建築用材の樹種についても調べ始めたそうです。古民家は木や草といった自然物でできており「自然と人の関わりの集大成」で、古民家を調べるとその地域の自然環境と人との関わりを理解することができますと言います。只見町には157棟ほどの古民家があり、その7割は曲り屋ですが、他の地方に見られるような玄関の方角に決まりはなく、玄関は道路を向き、座敷は川上という特徴がありました。古民家の使用樹種については、町内の7軒の古民家で部材採取にご協力いただき、キタゴヨウが多用されていることがわかりました。キタゴヨウはゴヨウマツの変種で、雪の多い地域に生育し、只見町では尾根上に馬のたてがみのように生育している様子よく目にする樹木です。ほかにスギ、ブナ、クリ、アカマツ、ケヤキも使用されており、家の部位で使用樹種を使い分けていることがわかりました。井田氏による長野県飯山市での同様の古民家調査では、スギ、ブナ、ナラがほとんどで、キタゴヨウは使われていない結果だったそうです。民家普請については、42軒にご協力いただき、聞き取り調査が行われました。当時のことを実体験され、お話いただける方は少なくなっている現状でしたが、古民家に使用する建材の採取は近くの山が多く、ソリや木流しで運んだことがわかりました。

講演会には47名の方が参加され、会場からたくさんの質問をいただきました。只見ユネスコエコパーク地域内の地域住民の自然利用の歴史を理解するよい機会となりました。



【自然観察会】 11月17日（土）

黒沢のコナラあがりこ林に行く

『ただみ観察の森』を活用した観察会の第3弾は、黒沢集落の共有林である『黒沢のコナラあがりこ林』で実施しました。今回は、地域住民による長年の自然利用の歴史や多雪地帯である只見町特有の自然環境を観察することを目的として開催されました。



▲講師の井田氏に質問をする聴講者

観察の森への急登を息を切らせながら上り、多雪環境に適応した日本海要素植物を観察し、鉄塔道を越えると、観察の森に到着です。途中、黄色の小鳥であるマヒワの大群に出会いました。観察の森には、胸高直径が1mを超えるコナラ巨木があちこちに見られます。これらは、地上から2~3mの高さで複数の幹に分かれ、その上にも2段程度幹が分かれた箇所を持つ特異な形をしています。これは「あがりこ型樹形」と呼ばれるもので、春木山で幹を雪上伐採し、その萌芽枝を薪材生産のために育て、数年ごとに繰り返し伐採利用した結果、形成されたものです。また、これらのコナラにはナラ枯れの被害がでていますが、林を保全するためにブナセンターが行っている殺菌剤注入の対策についても説明しました。観察会では6名の方が参加され、あがりこ型樹形の個性的な姿を一本ずつじっくりと眺め、町民にとっての天然資源の大切さとそれらを利用する知恵について理解を深めました。



▲あがりこの前で記念撮影



【その他の事業】 10月20日(土)~10月22日(月)

「全国ブナ林フォーラム

－ブナ林の保護・保全と持続可能な利用を目指して－

只見町で、全国ブナ林フォーラムが開催されました。

このフォーラムは、2007年の只見町での「自然首都・只見」宣言からの10年を振り返り、ブナ林の保護・保全と持続可能な利活用についてとそれらの活動を通じた日本のブナ林を抱える山間地域の将来について考えようと、只見町と全国ブナ林フォーラム町民実行委員会が主催して行ったものです。只見町ブナセンターは、全国ブナ林フォーラム町民実行委員会の事務局を担い、実行委員の町民の方々と共に事前準備に取り組んできました。

フォーラムは、10月20日(土)から10月22日(月)までの3日間にわたり開催され、10月21日(日)にはシンポジウムが行われ、その前後日には観察会が行われました。フォーラム開催にあたり、各地からご参加いただきました皆様には感謝申し上げます。以下に、フォーラムの概要を報告させていただきます。



1日目 事前自然観察会

1日目の自然観察会は、シンポジウムに先立ち只見町の自然環境、特に自然度の高い自然環境を理解いただくために開催され、34名が参加されました。只見地域は雪食地形が卓越し、複雑な地形とそれぞれの立地環境に対応した植生が見られます。すなわち、尾根にはキタゴヨウマツ、雪崩斜面にはマルバマンサクやミヤマカワラハンノキの低木林、谷部にはサワグルミ、トチノキを主とする溪畔林、それよりも安定した場所にはブナ林が見られます。浅草岳只見沢登山道沿いに見られるこれらの森林植生を間近に観察した後は、田子倉湖の遊覧船に乗り周辺の自然環境を概観しました。乗船の間には、田子倉ダム建設によって湖底に沈んだ旧田子倉集落で幼少期を過ごした只見町公認ガイドの方から水没以前の集落の様子やダム開発についてお話いただきました。



▲実際にブナ林を観察してもらいました

2日目 シンポジウム

2日目の21日に、季の郷湯ら里に於いてシンポジウムが行われ、只見町内外から約200名の方が参加しました。

シンポジウムのはじめには、基調報告として新潟大学名誉教授の紙谷智彦氏より、新潟県魚沼市大白川地区で行われているブナ二次林の育成管理と利用の実践的研究についての報告がありました。その後、北海道黒松内町、岩手県花巻市、長野県飯山市、徳島県上勝町、宮崎県綾町、福島県只見町の6地域から各地のブナ林の保護・保全の現状や利活用の実態について報告がされました。利活用については、自然観察会の開催や、トレイルランコースの整備、ブナ林の資源を活かした商品開発など各地の取り組みが紹介されました。

また、アトラクションとして只見町の伝統芸能である小林早乙女踊りが只見町立明和小学校5年生によって披露されました。

後半のパネルディスカッション(総合討論)では只見ユネスコエコパーク推進専門監の鈴木和次郎氏がコーディネーターとなり、報告者7名と会場の参加者とで将来のブナ林の管理のあり方と利用法に関する討議が行われました。



▲シンポジウムの会場での様子

シンポジウムの最後に「全国ブナ林フォーラム只見宣言」が採択され、ブナ林を抱える全国の地域社会、諸団体・個人が連携、協力をして、ブナ林をこの先も守り育て、活用し、地域社会を維持・発展させる運動に取り組むことが宣言されました。また、併せて『「自然首都・只見」2018年宣言』が提案され、2007年の「自然首都・只見」宣言から10年が経った現在、その意義を再確認し、この先の新たな10年も只見の自然環境と伝統的な生活、文化を守りながら、自立した地域社会を築き、維持発展させるために着実な取り組みを続けていくことを宣言したものが採択されました。

シンポジウム終了後には交流会が開かれ、約70名が参加しました。只見や会津地方の郷土料理や只見の伝統芸能である梁取太々神楽の演舞を楽しみながら交流を深めました。



▲交流会で披露された梁取太々神楽

3日目 オプショナル自然観察会

3日目の観察会は、只見町の「ただみ観察の森」のブナ林を含む2つのコースで行い、合わせて24名の方が参加されました。コース①では、ただみ・ブナと川のミュージアム、ふるさと館田子倉を見学した後に楢戸のブナ林を観察しました。この場所は、60年ほど前に天然林が伐採された後に再生したブナ二次林です。当初は、ナラ類やクリ、ブナが混生する林でしたが、キノコのほだ木の生産を目的としてナラ類、クリが選択的に伐採されたため現在はブナの純林が見られます。集落周辺では長年に渡る人の利用の結果、ナラ林やスギ人工林が広く見られる中で、集落付近に残る数少ないブナ林です。



▲あがりこ型樹形のコナラ

コース②では、梁取のブナ林を観察した後、成法寺を見学しました。梁取のブナ林は、もともと南会津林業事務所によって「学びの森」に指定され、地域の環境学習のために利用されていました。およそ80年前に薪炭材生産のために伐採された後に、実生から再生した二次林です。本数密度が高く、幹はすっとまっすぐで枝下が高いのが特徴です。また、比較的積雪量が少ないため、低標高のブナ林で一般的に優占するユキツバキは林床に見られません。観察の森西側には、コナラ・ミズナラの二次林が広がり、その中にはあがりこ樹形のものがあります。これは、春先の堅雪の上で行われた雪上伐採が行われてきた名残です。その後には、国の重要文化財である成法寺観音堂とそこに安置される聖観音菩薩像を見学しました。

===== その他のお知らせ =====

「ふるさと館田子倉」は改修工事により臨時休館しております

国道拡幅に伴う施設改修工事のため、ふるさと館田子倉（只見町ブナセンター附属民俗資料館）は、現在休館とさせていただきます。皆様には大変ご迷惑をおかけしており申し訳ございません。休館の日程は平成30年9月7日（金）～12月下旬（予定）となっております。「ふるさと館田子倉」に関するお問い合わせは「ただみ・ブナと川のミュージアム」（TEL：0241-72-8355）までお願いいたします。



只見町ブナセンター 2018年度下半期行事一覧（予定）

11月	只見の外来生物ーその生態と影響 11月23日～平成31年3月18日		
12月			
1月		「自然首都・只見」学術調査研究助成金事業成果発表会	
2月		移入植物とその影響（仮） 野生動植物保護監視員報告会	
3月	企画展アーカイブ 只見の自然を食べる	会津地方の伝統料理（仮）	冬のブナ林観察会

<編集後記> あっという間に11月も残すところわずかとなり、只見でもいよいよ雪が降り始めました。今年は雪が多そうだという声をよく聞きますが、一方でエルニーニョ現象により平年並みか少ないという予報もあるそうです。皆さんの予想は当たるのでしょうか。（山本）



発行 **只見町ブナセンター** 〒968-0421 福島県南会津郡只見町大字只見字町下 2590 番地



電話 0241(72)8355 ホームページ <http://www.tadami-buna.jp>

FAX 0241(72)8356 電子メール info-buna@amail.plala.or.jp

附属施設「ただみ・ブナと川のミュージアム」、「ふるさと館田子倉」

開館時間：午前9時～午後5時（最終受付は午後4時まで）

休館日：火曜日（祝祭日の場合は翌平日）、年末年始（12月29日～1月3日）